

# 枕草子における物づくしの章段

目加田 さくを

(I)(I)(I)

枕草子の物づくし形態  
 李義山雜纂と清少納言枕草子  
 その表現について

(I) 枕草子の物づくし形態

枕草子は事件を叙する章段を除けば、殆ど凡てが物づくしの章段である。

- (A) 「山は」「淵は」「家は」式の章段
- (B) 「めでたき物」「にくき物」「たゆまるゝ物」式の章段
- (C) 「春は曙」「思はむ子を」式の章段

これは(を)か(し)きもの(心)ぐる(し)きもの(と言ふ)主題が  
 布衍されて書きつゞられたもので「ものづくし」の一変形  
 である。

更にいへば

(D) 事件、行動を叙するもの

それすら、実は(を)か(し)き(ありがたき)(うれしくめ  
 いぼくある)事柄を撰り出して「書き尽さむとせし」もの  
 であつて、これ又「物づくし」の変形に外ならない。

従つて、枕草子(全篇)は、いはゞ、「物づくし」形態をとる随  
 筆文学である。モンテーニュやゴッティエなどのパンセは随想録  
 とよく訳されてゐるが、それはそれらが「随想」であつて凡そ枕  
 草子とは異なる形態のものであるからであり、それに対し、李義山  
 の雜纂は非常な近似を示してゐる。併し乍ら、その形態について  
 詳しく観察する時、枕草子の「物づくし」は、平板單調な雜纂形  
 態にとゞまることなく、(C)式、(D)式の変形をもつのであつて、物  
 づくし形態としては洗練されきつたものである事が分るのであ  
 る。

(A)式 普通名詞 + は + 固有名詞 ……

「山」は、小倉山、かせ山、三笠山、木のくれ山……と言  
 ふ様に、当該普通名詞の類の中で殊に興味を惹く固有名詞を次々

と列挙する。時にはその理由を簡単に、或は詳しく叙する事もある。此の式が「物づくし」形態中の最も原初的且單純な形態である。これに属する章段

十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十九、四十五、四十九、五〇、五十一、五十二、五三、五四、五五、五六、五七、九五、九六、九七、百九、百四八、百五一、百五二、百五三、百五四、(百五四)、百五五、百五六、百五七、百五八、百六九、百七六、百八二、百八三、百八四、百八五、百八六、(百八六)、百八七、百八八、百八九、百九〇、百九一、百九二、百九三、百九四、百九五、百九六、百九七、百九八、二百二〇、二百二一、二百二七、二百二八、二百二九、二百三〇、二百三一、二百三二、二百五三、二百五四、二百五五、二百五六、二百五八、二百五九、二百六〇、二百六一、二百六二、二百六三

全章段の27%を占める。(テキスト山岸氏校註枕草子に依る、以下同)

(B)式 形容詞 (又は之に準ずる形容語) 物 + : : : : 形容詞

「にくき物、急ぐことある折に来て長言する賓客……硯に髪の入りにすられたる……。俄にわづらふ人のあるに験者求むる……いと憎し。」

と言ふ様に、「にくき物」と始に主題を掲げ、これに属するものを列挙して行つて最後に「憎し」と評を以てしめくゝる。これに属するもの。

三、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、三十八、四十一、五十八、五十九、六十二、六十五、(六十五)、六十六、七十一、七十四、七十五、七十九、八〇、八十一、八十二、九十三、九十四、九十九、百、百一、百二、百四、百五、百六、百七、百八、百十、百二十一、百二十二、百二十三、百二十四、百二十八、百二十九、(百二十九)、百三〇、百三十一、百三十二、百三十四、百三十五、百三十六、百三十七、百三十八、百三十九、百四〇、百四十一、百四十六、百四十七、百四十九、百五〇、百六十六、百六十八、百七十四、百七十八、二百一十一、二百一十二、二百十三、二百三十三、二百三十四、二百三十五、二百三十六、二百三十七、二百三十八、二百四〇、二百四一、二百四二、二百五〇、二百五三

全章段中25%

(C)式 名詞 (又は行動、状態の名詞形をとれるもの) + は + : : : : 形容詞

「春は曙やう／＼白くなりゆく山きは……。夏は夜……をかし 秋は……」

の場合の如く、文章の内部又は終末に「をかし」「心にくし」等の評語があるので証されるのであるが、「をかし」或は「心にくし」と感ずる自然又は人間の状態、行動等について、その所以を述べてゆくもの。もしそれが「憎し」と言つた否定的な場合には、

かくあらまほしき行動、状態に續々言及する。それが原型であつて、中には(C)の又変形が行はれてゐるが此の事についてはくたくしくなるので省略する。

一、二、四、七、八、二〇、二八、二九、三三、四〇、四二、四三、四六、四七、四八、六〇、六一、六三、百三、百十二、百二十六、百二十七、百五九、百六〇、百六七、百七〇、百七一、百七十二、百七三、百七五、百七七、百七九、百八一、二百、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇八、二〇九、二一〇、二一四、二一五、二二三、二二四、二二五、二二六、二三九、二四四、二四五、二四六、二五七、二六四、二七一、二七九、二八〇、二八三  
がこれに属し全体の20%を占める。

(D)式 …… 形容詞 ……

「雪の山」の段にしろ、「おいこの君にこそ」の段にしても、結局は「をかし」「あはれ」「うれし」「めでたし」等と感じた事件を思ひ出して書きつける。或る場合は一説話(一件)、或る場合は挿話を含む長いものともなり、又、二話(二件)、三話(三件)と書き続けられるもので、著者も言ふ如く「打聞」的なものまで附け加へられてゐる。それは、「あはれ」又は「をかし」等と感じた事件をその章段中に類纂したい欲求に駆られた為であり、この欲求即ち、物づくしの意欲の展開に外ならないのである。

五、六、九、十九、三十、三一、四四、六三、六四、六七、六九、七〇、七二、七三、七六、七七、七八、八三、八四、八五、八六、

八七、八八、八九、九〇、九二、九八、百十一、百十三、百十四、百十五、百十六、百十七、百十八、百十九、百二十〇、百二十四、百二十五、百四二、百四三、百四四、百四五、百六一、百六二、百六三、百六四、百六五、百八〇、二〇五、二〇六、二〇七、二一六、二一七、二一八、二一九、二二二、二四三、二四八、二四九、二五一、二五二、二六五、二六六、二六七、二六九、二七〇、二七二、二七三、二七四、二七七、二七八、二八一、二八二、二八四、二八五

がこれに属し27%をしめる。

以上のおほまかな統計によつても分る様に(A)及び(D)が優勢であるとはいへ10%に及ぶひらきはしない。四形態を著者の着想が自ら自由に駆使したのであつてそこに自らなる変化と統一とが感ぜられる全篇物づくしの随筆なのである。因みに、(A)式では主として自然の風物に主材し、(B)式では人事に、(C)式は自然現象及び人事、(D)式では人事をとりあげてゐる。一見、物語(世の中の物語)乃至は打聞とも思はれる様な章段も、それはあくまで「物づくし」形態の変形、(A)(B)より進んだ(D)式である事を注意すべきではなからうかと思ふのである。

(I) 李義山雜纂と清少納言枕草子

晩唐の詩人李商隱(義山)の雜纂が一度世に出て以来、何々雜纂と称する所謂雜纂物が中国に輩出した。その祖であるだけに義山

雜纂は実に「うがち」の利いたおもしろい作品である。その形態が前述枕草子の(B)式形態に酷似してゐる。例へば、不相称(ふにあひなもの)

窮波斯 病医人 貧しいペルシヤ人 病氣の医者

不解飲弟子 下戸の弟子

瘦人相撲 瘦せぎすが相撲とる

肥大新婦 ふとつた花嫁

先生不識字 先生が文字をしらぬ

屠家念経 屠殺やの念仏

社長乘涼轎 社長様が粗末な轎にのる

老翁入娼家 爺さんが娼家にあがる

の様に、皮肉あり、をかしみありで、清少納言が験者の苦しみを述べたてた揚句「これは昔の事なんめり今様はいと安げなり」、  
「若きはものも(コノミ春曙抄本)ゆかしからむ女などのある所をもなど忌みたる様にさし覗かずもあらむ」と皮肉や「うがち」を放つのと氣脈の通ずるものさへある。その為古来枕草子の種本に雜纂を想定してゐる学者もかなりあつたこの事は現在未だ断定出来ない問題として残されてゐる。たゞ、両者の間にその形態の酷似と年代的なひらき(晩唐と平安中葉で約一世紀)が存する事だけで素朴に影響を想定する事に筆者は疑をさしはさまないではゐられないのである。

(1) 義山雜纂將來の可能性に対する疑ひ

現在書目録には溫季と併称された溫庭筠の集は記録されてあるが李商隱集は見当らない。又義山雜纂の名も見出せない。この事実

は(たとへ冷泉院の火災を念頭においたとしても)、雜纂が世に流布してゐたものではない事を証明する。では現在書目録後清少納言時代迄の間に將來されたであらうか。木宮氏日支交通史によれば、日唐交通は事実上承和五年の遣唐使派遣をもつて公式には断絶した。即ち文化輸入使節は赴かなくなり、以後は主として唐、宋商人の來朝による商取引の途が残されたばかりである。これに便乗して往來した唐僧も命がけの航海であるから非常に稀である。留学僧達は官費の使途に意を用ゐて將來目録には宗教書以外の「雜書」は詳述を避けたと言はれる。或は購入にまで幾分の顧慮がありはしなかつたか。さう言ふ危険や懸念をもつ数人の唐僧の往來に義山雜纂が將來された、(そしてそれが民間の一婦人の手に渡つた)と想定出来るであらうか。どうも疑はしいと思ふ。

(2) 男性の義山雜纂追隨者を見出しえない事

義山雜纂がかりに將來されてゐた、と仮定しても、清少納言一人がこれを読んだとは考へられない。清少納言に至る迄には必ず漢学の素養ある男性の手を経ないわけにゆかなかつたであらう。雜纂は社会、人事にわたる卑近滑稽な素材が如何にも男性的タッチで採りあげられてゐる。これを讀めば日本靈異記の序文に景戒が述べる様な心境——(何も中国のものにのみ渴仰しないでもよい。日本にもそんなおもしろい話ならいくらでもある。一つ日本のをかいてみよう——)にならざるを得なかつたであらう。雜纂形態のもつ表現の容易さ主題の斬新さは女性よりもむしろ男性に向くものである。殊に清少納言の父元輔は、多くの逸話を残してゐるが、(その逸話たるや彼の人となりが雜纂の世界に属するも

のである事を物語つてゐる。彼が雜纂を手にして無為で済まさうとは考へられない。梨壺の五人の一人である元輔はもとより、他の何人も、当時これを讀んだらしい形跡はなく、ヒントをえてかいたと思はれるものもないのである。

(3) 清少納言の漢文学の素養について

枕草子の中で「文は文集文選新賦史記五帝本紀願文表博士の申し文」と言つてゐる通り、枕草子中、漢籍に典拠を求めたものを探せば、白氏文集が圧倒的に多い。次に史記、漢書、蒙求、列仙伝、詩經、述異記、論語、それに法華經、孔雀明王經等の仏典であり、その他多分、晋書も讀んでゐようし、或は後の和漢朗詠集の粉本めいたものがあつたとすればさういふものも見てゐたかもしれない。前掲の書でも詩經なども「鶴は鳴く声雲居まで聞ゆる」と言ふのみであるから自身讀んでゐたか、父の言のきゝかぢりかは明らかでない。何れにしてもさう博学とは思はれない。

以上の様な理由で筆者は李義山雜纂と枕草子の種本と想定する事に疑念をもつのであり、枕草子は雜纂とは無関係に、古来言はれて来た様に和名抄、類聚古集、古今六帖等にヒントを得て当時醸成されつゝあつた歌枕づくし、ものはづくしの基盤の上に生れたものであらうと思ふのである。

(I) その表現についで

枕草子の「物づくし」形態は前述の如く義山雜纂に非常な近似を示してゐたが、他面、表現力において彼此にかなりの相違、優劣が存する事も見逃せないのである。即ち、雜纂を対照にしつゝ枕

草子の物づくしの章段がもつ表現の様相を概観してみたいと思ふ。要点を挙げるならば

- (1) 簡潔な表現に対する重複を嫌はぬ表現
- (2) 附味の妙をもつ表現と單なる雜記
- (3) アクセントをもつ表現と平記
- (4) 繊細と重厚
- (5) 主題の相違

(1) 簡潔な表現に対する重複を嫌はぬ表現

枕草子が簡潔的確な表現に卓越してゐる事は周知の事實であるから説明を略する。雜纂は平気で短い章段中に重複を敢てしてゐる事が多い。ために印象が不鮮明となつてしまつてゐる。(例、「相似」の段で七行の中二行にわたり尼姑似……がある如き)

(2) 附味の妙をもつ表現と單なる雜記

枕草子の物づくしは連句の附味を思はせるものがある。連句における物附、心附の段階のみでなく、「うつり」「ひゞき」「にほひ」とよばれる蕉風の高次の境地に類するもの、又これと異つた味で、もつと近代的な感覺の附味まで出してゐると観る事が出来る様である。

例 (1) 「しらべは風香調、黄鐘調、蘇の合の急、鶯の囀と言ふ

調……」

(A) 式は「物」でつけてゆく最も原初的物附

(2) 「覺東なき物十二年の山籠りの法師の女親。知らぬ所に聞なるに行きたるにあらはにもぞあるとて火をもともさ

で流石に竝み居たる。……」

(B)式は「おぼつかなき」「にくき」「めでたき」等々の  
心でつけるからこれも必然的に心附的である。

右の例で分る如く、(1)物附、(2)心附は、「物づくし」形態の故に  
義山雜纂でもその味が出てゐる。例示すれば次の如き。

富貴相

富貴のすがた

駿馬嘶 蠟燭淚 栗子皮

駿馬が高くないなくの。蠟燭の淚。

荔枝殼 落花飛 鶯燕語

栗子の皮。荔枝の殼。落花が飛ぶの  
鶯や燕のさへつり。鶯の聲。おと

讀書声 遣下花鈿 高楼

しものゝ花鈿。高どのゝ上で笛を吹  
く。藥をうつたり茶をひいたりする

上吹笛 擣藥碾茶声

音。

しかし乍ら、(3)「にほひ」「ひゞき」「うつり」と言つた附味は、  
例へば枕草子の

三二段「七月ばかりいみしく暑ければ万の所開けながら夜も明

すに月のころは寢驚きて見出すにいとをかし、闇も又をかし、

有明はた言ふも愚かなり、いと艶やかなる板の端近う鮮かなる畳

ひとひらうち敷きて三尺の凡帳奥の方に押しやりたるぞ味気なき

……人は出でにけるなるべし……」此の(a)(b)(c)(d)(e)の附味にみ

られる「にほひ」の妙、(c)より(d)へ、(d)より(e)へうつる「うつり」

の妙は義山雜纂には求められない。更に「にほひ」「ひゞき」「う

つり」とは異つてもつと近代的感觉の附味(4)に至つては枕草子な

らではの感が深い。

五九段「たとしへなき物、夏と多と、夜と昼と、雨降る日と照

る日と、人の笑ふと腹立つと、老いたると若きと、白きと黒きと、  
思ふ人と憎む人と、同じ人ながら心ざし有る折と変りたる折は誠  
にこと人とぞ覺ゆる、火と水と、肥えたる人瘦せたる人……」

右の引用文で、実にたとしへなき物どもが他愛なく列記されて来  
る。何気なく讀みつゞける中、傍線の箇所ハツとする。人間存  
在の宿命と言ふか、人の世の寂しむと言ふか、さう言つた眞剣な  
氣持に直面するのである。が次の瞬間「火と水と」と、ガラリと  
落す。この鮮やかな附け具合である。「肥えたる人瘦せたる人……」  
と又何気ない顔でかきつゞけて行くのである。

(3) アクセントをもつ表現と平記  
枕草子六二段「有雜き物、翼に替めらるゝ婿又姑に思はるゝの  
嫁の君、毛の良く抜くる銀の毛抜、主そしらぬ人の従者、露の癖  
なきかたち心ありさま勝れて世にふるほと聊かの傷無き、同じ処  
に住む人の互に恥ち交し聊かの隙なく用意したりと思ふが遂に見  
えぬこそかたけれ、物語集など書き写す本に墨附けぬ良き草子な  
どはいみしう心して書けどかならずこそきたなけになるめれ。男  
女を言はし女とちも契り深くて語らふ人の末まで中よき事難  
し」

右の傍線○印の箇所は章段の終末にあり、前掲五九段の傍線は章  
段の中央にあつて、ともに読者の注意力を凝集せしめる迫力をも  
つ「物」である。更に詳しく観れば点線の部と符合のない部分(1)

(2)(3)(4)(5)(6)(7)とは強弱強弱強弱強と印象に訴へる力が異つて居  
て最後に「男女をば……女とちも……末まで中よき事かたし」と  
深い感銘のまゝで結ぶ。かゝる表現は雜纂には見出す事が出来な

る日と、人の笑ふと腹立つと、老いたると若きと、白きと黒きと、  
思ふ人と憎む人と、同じ人ながら心ざし有る折と変りたる折は誠  
にこと人とぞ覺ゆる、火と水と、肥えたる人瘦せたる人……」

右の引用文で、実にたとしへなき物どもが他愛なく列記されて来  
る。何気なく讀みつゞける中、傍線の箇所ハツとする。人間存  
在の宿命と言ふか、人の世の寂しむと言ふか、さう言つた眞剣な  
氣持に直面するのである。が次の瞬間「火と水と」と、ガラリと  
落す。この鮮やかな附け具合である。「肥えたる人瘦せたる人……」  
と又何気ない顔でかきつゞけて行くのである。

(3) アクセントをもつ表現と平記  
枕草子六二段「有雜き物、翼に替めらるゝ婿又姑に思はるゝの  
嫁の君、毛の良く抜くる銀の毛抜、主そしらぬ人の従者、露の癖  
なきかたち心ありさま勝れて世にふるほと聊かの傷無き、同じ処  
に住む人の互に恥ち交し聊かの隙なく用意したりと思ふが遂に見  
えぬこそかたけれ、物語集など書き写す本に墨附けぬ良き草子な  
どはいみしう心して書けどかならずこそきたなけになるめれ。男  
女を言はし女とちも契り深くて語らふ人の末まで中よき事難  
し」

い。試みに「悪模様」を挙げてみれば彼此の相違が明瞭になると思ふ。

「作客与人相爭罵 打毬墜馬

対大僚食咽 僧尼新還俗

筵上乱叫喚 搥奪人話柄

著鞋踏躑台卓对丈人丈

母唱豔曲嚼殘魚肉置盤

上」

お客になつて人と喧嘩を始める。毬を打つ拍子に馬から落ちる。上役と対座して食事をする。僧尼が又娑婆に還俗したの。宴席にあつて大いさげをあげてあはれまはる。人の話をひきとる。靴をはいたまま話し出しもせぬ中にもぐりこむ。お客がテールをふんでひつくりかへす。妻の父母の前でつやつぱい歌を歌ふ。魚肉のかみちらしをテーブルの上に散らかす。汁椀の上を箸を横たへる。

#### (4) 纖細と重厚

前掲「悪模様」を枕草子の「にくき物」と比較して見る時、何れも飲酒家の醜い様子を叙し乍ら雜纂の大綱みに対し枕草子の微に入り細を穿つ芸のこまかさに対比される。この事は男女性の相違、国情の差別にも依る事であり既に言ひ尽されたところであるから省略する。

#### (5) 主題の相違

先に(I)項で見て来た様に、枕草子は(A)(C)及び(B)(D)の四形態において、自然及び人間のたゞずまひ、行動に纖細鋭利な感覚を働かせてゐたのであるが、義山雜纂は自然觀照といふものを有たず(B)式形態のみであつた。その狙ひは、社会の「うがち」にあり、滑稽皮肉はやゝ卑俗味を帯びてゐる。人間生活の伴りなき姿、人生の味を裏客觀的傍觀的にとり扱つてゐる。枕草子の狙ひは宿命的

な人間存在にも訪れる明るく楽しい一面の美「をかし」——にある。「をかし」は喜悅と優美と愛情との三契機によつて醸し出される王朝特有の味はひである。「あはれ」が悲哀と優美、愛情の三契機によるひそやかな点であり、それをとりあげたのが源氏である。枕草子は「をかし」で行かうとする。それは「をかしみ」ではない、主体的に「をかし」を体験してゐるのであつて雜纂の傍觀的立場と立場を異にしてゐる。雜纂ならば「老いて頭白きなどが人に案内言ひ女房の局などによりて己が身の賢きよしなど心一つをやりて説き聞かうするを若き人々は眞似をし笑へど争でか知らむ」の若き人々は書かないであらう。まして「……など言ひて得たるはいとよし得ずなりぬることいと哀れなれ」とは清少納言の「をかし」の態度なのである。

以上枕草子を「物づくし形態」と言ふ立場から考察し、連句との案外の近接について言及した。連句とのつながりについては、雜纂の種本問題と共に稿を改めて考察するつもりである。(テキストは此の小論には前田本系、堺本系も立論上大差なしとみて三卷本系(山岸氏枕草子)に従つた。A式(C)式の自然觀照、(B)式(D)式の間批判については古典研究(昭和十六年)「枕草子における人間批判」と言ふ拙文を併せ読まれ、ば幸甚である)

次に唐代叢書本、叢書集成本によつて義山雜纂本文をあげ、章段別、返点を施した。両書でも猶錯簡誤脱が多いと思はれるが今一応讀解したところを記す事とする。後日諸本の校合を了へて口語訳を改めたいと思ふ。(猶希望の方は義山雜纂口語訳(プリント筆者訳出)を見られたい。)

第一 必不来  
醉客逃レ席。客作ニ倫物ニ去。追ニ王侯家人。把レ棒呼レ狗。窮措大喚ニ妓女。

第二 不相称  
窮波斯。病医人。不レ解ニ飲弟子。瘦人相撲。肥大新婦。先生不レ識レ字。屠家念経。社長乘ニ涼轎。老翁入ニ娼家。

第三 羞不出  
新婦失レ礼。尼姑懷孕。相撲人面腫。富人乍貧。処子犯ニ物議。重孝醉レ酒。

第四 怕人知  
匿一人ニ子女。犯二人愛寵。透税。賊賦。

第五 不 嫌  
饑得ニ粗食。徒行得ニ劣馬。行久得ニ坐次。渴飲ニ冷漿。行急得ニ小船。過レ雨得ニ小屋。

第六 遲 滯  
新婦見レ容。窮漢醜率。貧家嫁娶。謁ニ致仕官。孕婦行步。

第七 不得已  
忍レ病飲レ酒。大暑赴レ会。掩レ意打兒女。流レ汗行レ礼。忍レ痛灼文。為レ妻罵ニ愛寵。冒レ暑迎謁。老乞ニ休致。窮寺院待レ客。

第八 相 似  
京官似ニ多ニ瓜暗長。鴉似ニ措大ニ饑寒則吟。印似ニ嬰兒ニ常隨レ身。縣官似レ虎動則害レ人。尼姑似レ鼠入ニ深処。燕似ニ尼姑ニ有伴方行。蟬似レ猫燧処便住。

第九 不和不解

措大解レ音則廢レ業。婦人解レ詩則犯ニ物議。僧解レ飲則犯レ戒。劣奴解ニ識字一則作レ過。子弟解レ燒煉一則貧。士人解ニ手芸一則卑汚。

第十 惡不久  
夫婦爭ニ小事。罵ニ愛寵。大僚門客發レ怒。賊濫官打ニ罵公人。姦汗僧尼罵ニ行童。

第十一 惱 人  
遇ニ佳味一脾家不和。終夜飲酒樽卻空。方謁ニ上官一忽背癢。賭博方勝油尽難レ尋。淘井漢急尿尿。遺不レ去無頼窮親。

第十二 失本體  
不レ学レ發ニ遺書題一失ニ子弟。弔レ孝不レ哀失ニ凶礼體。不レ收ニ拾碗器家事。口中不ニ喃喃一失ニ老婢體。送レ客不レ出門失ニ主人体。不ニ闌腰一不レ持刀砧一失ニ厨子體。不レ点ニ檢學生作課念書一失先生體。否ニ打口罵一失ニ節級體。不ニ早晚礼拜念仏一失ニ僧尼體。早晚不レ点ニ檢門戶家私一失ニ家長體。僕子著レ禮衣服寬長失ニ僕子體。逃レ席後不ニ伝語謝ニ主人一失ニ賓客體。唱ニ小喏一行步遲緩失ニ武官體。

第十三 隔壁聞語  
說ニ所送物好レ還慶一必是不レ佳。新娶レ婦卻道ニ是前緣一必見醜。說ニ太公八十遇ニ文王一必是不レ達。說ニ食祿有ニ地必是差遣不レ好。說ニ隨ニ家豐一儉上必是待レ客不レ成ニ礼數。說ニ屋子住得恰好一必是小狹。况ニ罵祖先一必是家計不レ成。

第十四 富貴相  
駿馬嘶。蠟燭淚。栗子皮。荔枝殼。落花飛。鶯燕語。讀書聲。遺



下花細。高楼上吹笛。擣藥レ嘸レ茶声。

第十五 謾人語

說ニ風塵有情一。說ニ燒煉致富一。說ニ在レ官課績一。說ニ主上見ニ知。說ニ所レ入莊課一。說ニ愛寵年紀小。窮縣說ニ官清一。自說ニ勸苦讀書一。誇ニ說器皿例一。

第十六 酸 寒

山縣移市。村縣喝道。村縣待レ賓。村漢呼レ雞。村漢著ニ新衣一。牛背吹レ笛。散樂打ニ單枝鼓一。

第十七 不 快 意

鈍刀切物。破帆使レ風。樹陰遮ニ景致一。築レ牆遮レ山。花時無レ酒。暑月背レ風排レ筵。

第十八 惶 愧

犯ニ人忌諱一。過ニ見讐家一。欠債不レ償逢レ主。參謁失レ礼。醒後聞ニ醉語一。

第十九 殺 風 景

花間喝道。看レ花淚下。苔上鋪レ席。斫ニ卻垂楊一。花下曬レ棍。游春重載。石筍繫レ馬。月下把レ火。妓筵說ニ俗事一。果園種レ菜。背レ山起レ樓。花架下養ニ雞鴨。

第二十 不 忍 聞

孤館猿啼。市井穢語。旅店秋砧声。少婦哭レ夫。老人哭レ子。落第後喜鵲。乞兒夜号。居レ喪聞ニ樂声一。纔及第便卒。

第二十一 虛 度

花時多病。好時節徧迫。闍官娶ニ美婦一。貧家節日。好家業不レ和。貧家好花樹。好景不レ吟。好庁館不レ作レ會。

第二十二 不 可 過

夏月肥漢。入レ舍妻惡。遭ニ貪酷上官一。惡俗同僚。大暑涉ニ長途。对ニ羸人一久坐。舟中雨漏。茅屋下穢濕。守令好レ尋レ事。

第二十三 難 客

僧道对ニ風塵一笑語。僕人学ニ措大体段一。卑幼傲ニ尊長一。僕妾攙言語。武人村夫学ニ書語一。

第二十四 意 想

多月著ニ碧衣一似レ寒。夏月見レ紅似レ熱。入ニ神廟一若ニ尼鬼一。腹大師尼似レ有レ孕。重幙下似レ有レ人。過ニ屠家一覺瘡。見レ水心中涼。見レ梅齒歌。

第二十五 惡 模 樣

作レ客与レ人相爭。打レ毬墜レ馬。对ニ大僚一食咽。僧尼新還俗。筵上乱叫喚。攙ニ奪人話柄一。著レ鞋臥ニ人床一。未レ語先笑。作レ客踏ニ翻台卓一。对ニ丈人丈母一唱ニ豔曲一。嚼殘魚肉置ニ盤上一。横レ箸在レ蒸美碗上レ。

第二十六 不 達 時 宜

下賤人前談ニ經史一。向ニ娼婦一吟レ詩。認ニ他高貴一為親。將ニ主人酒食一作ニ人情一。賤レ食還ニ主人一。將ニ男女一赴レ席。誇ニ男女伎倆一。獎ニ男女嬌駛一。筵上包ニ彈品味一。強学ニ時樣一收束。食後不レ起坊ニ主人一。問ニ主人魚肉倆一。与ニ寡婦一認レ親往来。喫ニ他飲食一不ニ謙讓一。借ニ他物一令自來取一。入ニ人房闖一取ニ人物一看。得ニ人恩一不レ思レ報。向ニ人花園一採レ果。窮漢說ニ大話一。家貧学ニ富人一。作レ客自呼レ賓。暑月排レ筵久坐。

第二十七 悶 損 人

請<sub>二</sub>貴客<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>來。惡客不<sub>レ</sub>請自來。被<sub>二</sub>醉人<sub>一</sub>纏住不<sub>レ</sub>放。物賤無<sub>レ</sub>錢買。出門逢<sub>二</sub>債主<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>醫家<sub>一</sub>對坐。大暑逢<sub>二</sub>惡客<sub>一</sub>。美妾妬<sub>レ</sub>妻。

### 第二十八 癡 頑

有<sub>レ</sub>錢不<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>債。知<sub>レ</sub>過不<sub>レ</sub>能改。見<sub>二</sub>他言語<sub>一</sub>強拗。見<sub>二</sub>人文字<sub>一</sub>強評騰。自不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>過怪<sub>レ</sub>人。把<sub>レ</sub>酒犯<sub>レ</sub>令不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>罰。家貧強作<sub>レ</sub>富貴相<sub>一</sub>。

### 第二十九 愚 味

背面說<sub>二</sub>人過<sub>一</sub>。好說<sub>二</sub>人家密事<sub>一</sub>。凶<sub>二</sub>他酒食<sub>一</sub>作<sub>二</sub>証人<sub>一</sub>。三頭二面趨<sub>二</sub>奉人<sub>一</sub>。父母在索<sub>二</sub>要分析<sub>一</sub>。会<sub>レ</sub>聚不<sub>レ</sub>識<sub>二</sub>尊長位次<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>惠<sub>二</sub>於人<sub>一</sub>望<sub>二</sub>人報<sub>一</sub>。

### 第三十 時人漸顛狂

無<sub>レ</sub>故讐<sub>二</sub>始他人<sub>一</sub>。酒後呼<sub>二</sub>鬼神<sub>一</sub>。孝子說<sub>二</sub>歌令<sub>一</sub>。重孝<sub>レ</sub>雞走<sub>レ</sub>馬。讐<sub>二</sub>記思門<sub>一</sub>。長大漢放<sub>二</sub>風箏<sub>一</sub>。養<sub>二</sub>間漢<sub>一</sub>出入。婦女出<sub>二</sub>街妨<sub>一</sub>罵賢。壳<sub>レ</sub>田了吉凶。將<sub>二</sub>田宅<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>人作<sub>レ</sub>保。

### 第三十一 非 礼

呼<sub>二</sub>兒孫<sub>一</sub>表<sub>レ</sub>德。母在呼<sub>レ</sub>舅作<sub>二</sub>酒陽<sub>一</sub>。对<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>呼<sub>二</sub>妻弟<sub>一</sub>。聽<sub>二</sub>妻話<sub>一</sub>怪<sub>二</sub>尊長<sub>一</sub>。祭<sub>二</sub>亡人<sub>一</sub>卻動<sub>レ</sub>樂。徑入<sub>二</sub>他人房闖<sub>一</sub>。

### 第三十二 枉 屈

好父母無<sub>二</sub>好子<sub>一</sub>。好兒無<sub>二</sub>好婦<sub>一</sub>。好女無<sub>二</sub>好婿<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>錢不<sub>レ</sub>会<sub>レ</sub>使。好衣不<sub>レ</sub>会<sub>レ</sub>著。好店館不<sub>レ</sub>灑掃<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>疋帛<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>裝著<sub>一</sub>。好顔色不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>疋配<sub>一</sub>。好妾駟<sub>二</sub>使重難事<sub>一</sub>。惜<sub>レ</sub>錢有<sub>レ</sub>病不<sub>レ</sub>医。男女長成不<sub>レ</sub>教。家藏<sub>レ</sub>書不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>說。明月夜早睡。有<sub>二</sub>好花<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>吟<sub>レ</sub>詩酌<sub>レ</sub>酒。近<sub>二</sub>好山水<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>遊玩<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>美味<sub>一</sub>慳藏<sub>レ</sub>臭腐。清要官自

犯賊罪。有<sub>二</sub>美質<sub>一</sub>懶惰廢業。權在<sub>レ</sub>手不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>好事<sub>一</sub>。年少事好<sub>レ</sub>間不<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>事。

### 第三十三 不 祥

臥喫<sub>レ</sub>食。無<sub>レ</sub>事嗟歎。臥<sub>二</sub>床上<sub>一</sub>唱曲。露頂喫<sub>レ</sub>食。露頂写字。牽<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>作<sub>二</sub>祝誓<sub>一</sub>。搥<sub>レ</sub>骨罵。薦上坐。对<sub>二</sub>日月<sub>一</sub>大小便。散<sub>レ</sub>髮。未<sub>レ</sub>食碗中先插<sub>二</sub>匙箸<sub>一</sub>。

### 第三十四 順 貧

家有<sub>二</sub>懶婦<sub>一</sub>。早臥晚起。養<sub>レ</sub>子不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>父。作<sub>レ</sub>債追陪。倉庫不<sub>二</sub>点檢<sub>一</sub>。莊園不<sub>二</sub>收拾<sub>一</sub>。抛<sub>二</sub>撒飲食<sub>一</sub>。愛<sub>二</sub>賭博飲酒<sub>一</sub>。漫藏<sub>二</sub>無用物<sub>一</sub>。狼<sub>二</sub>籍米穀<sub>一</sub>。棄<sub>レ</sub>業逐<sub>レ</sub>樂。家事不<sub>二</sub>愛惜<sub>一</sub>。多蓄<sub>二</sub>愛寵<sub>一</sub>。好<sub>二</sub>遷移不<sub>レ</sub>止<sub>一</sub>。好<sub>レ</sub>結納<sub>二</sub>權貴<sub>一</sub>。慳不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>礼。物貴爭<sub>レ</sub>買。物賤反不<sub>レ</sub>買。多作<sub>二</sub>淫巧<sub>一</sub>。遮<sub>二</sub>蓋家人作<sub>二</sub>非為事<sub>一</sub>。

### 第三十五 必 富

勤求儉用。見<sub>レ</sub>芸広学。常点<sub>二</sub>檢家事<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>迷<sub>二</sub>酒色<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>欠<sub>二</sub>債負<sub>一</sub>。奴婢解<sub>二</sub>耕織<sub>一</sub>。夜眠早起。家養<sub>二</sub>六畜<sub>一</sub>。耕作不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>時。及<sub>レ</sub>時收藏。子弟一心。主母不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>佞。諸婦和諧。不<sub>レ</sub>嫌<sub>二</sub>鹹辣<sub>一</sub>。財物有<sub>二</sub>簿籍<sub>一</sub>。積<sub>レ</sub>少成<sub>レ</sub>多。買壳不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>時。物料不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>踐。

### 第三十六 有 智能

立性有<sub>レ</sub>守。密事機藏。結<sub>二</sub>交有<sub>レ</sub>智人<sub>一</sub>。臨<sub>レ</sub>事覺悟。酒後不<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>語。避<sub>二</sub>他人忌諱<sub>一</sub>。博<sub>レ</sub>古知<sub>レ</sub>今。不<sub>レ</sub>習<sub>二</sub>賤劣事<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>妄自逞<sub>レ</sub>能<sub>一</sub>。尊<sub>二</sub>敬<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>德<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>親<sub>二</sub>近小人<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>妄信<sub>二</sub>奴僕<sub>一</sub>。入<sub>レ</sub>門問<sub>レ</sub>諱。入<sub>レ</sub>境問<sub>二</sub>風俗<sub>一</sub>。夜間醒睡。有<sub>レ</sub>疑問<sub>レ</sub>人。不<sub>二</sub>共<sub>二</sub>愚人爭<sub>一</sub>是非<sub>一</sub>。

### 第三十七 教 子

習<sub>二</sub>祖業<sub>一</sub>。立言不<sub>レ</sub>回。知<sub>二</sub>禮義<sub>一</sub>廉恥<sub>一</sub>。精<sub>二</sub>修六芸<sub>一</sub>。談對明敏。進退威儀。忠良恭儉。孝敬慈惠。博學広覽。交遊賢者。不<sub>レ</sub>事<sub>二</sub>嬉遊<sub>一</sub>。有守。過<sub>レ</sub>事有<sub>レ</sub>知。

第三十八 教 女

習<sub>二</sub>女工<sub>一</sub>。議論<sub>二</sub>酒食<sub>一</sub>。溫良恭儉。修<sub>二</sub>節容儀<sub>一</sub>。學<sub>レ</sub>書學<sub>レ</sub>算。小心軟語。閨房貞潔。不<sub>レ</sub>唱<sub>二</sub>詞曲<sub>一</sub>。聞<sub>レ</sub>事不<sub>レ</sub>伝。善<sub>二</sub>事尊長<sub>一</sub>。

第三十八 失去就

卸<sub>二</sub>起帽<sub>一</sub>共<sub>レ</sub>人言語。罵<sub>二</sub>他人家奴婢<sub>一</sub>。鑽<sub>レ</sub>壁窺<sub>二</sub>人家<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>敲<sub>レ</sub>門直<sub>二</sub>入人家<sub>一</sub>。席面上不<sub>レ</sub>慎<sub>二</sub>涕唾<sub>一</sub>。主人未<sub>レ</sub>請先上<sub>レ</sub>座。開<sub>二</sub>人家盤合書啓<sub>一</sub>。主人未<sub>レ</sub>揖食先<sub>レ</sub>箸。衆食未<sub>レ</sub>了先<sub>レ</sub>卸<sub>レ</sub>箸。探<sub>レ</sub>手隔<sub>レ</sub>坐取物。

第四十 強 会

見<sub>二</sub>他文籍<sub>一</sub>強披覽。見<sub>二</sub>他鞍馬<sub>一</sub>逞乘<sub>レ</sub>騎。見<sub>二</sub>他弓矢<sub>一</sub>強彈射。見<sub>二</sub>他物件<sub>一</sub>強評<sub>二</sub>価色<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>他文字<sub>一</sub>強彈駁。見<sub>二</sub>他人家<sub>一</sub>強処置。見<sub>二</sub>他鬪打<sub>一</sub>強助拳。見<sub>二</sub>他評論<sub>一</sub>強断<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>。

第四十一 無見識

不<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>事因<sub>一</sub>先罵<sub>レ</sub>人。不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>隨<sub>レ</sub>人做<sub>レ</sub>事。俗人學<sub>二</sub>僧家道場<sub>一</sub>。遇<sub>レ</sub>事不<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>別是非<sub>一</sub>。縱<sub>二</sub>兒子寵養<sub>一</sub>。男兒學<sub>二</sub>女工<sub>一</sub>。

第四十二 要小下便宜

不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>飲酒至<sub>レ</sub>醉<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>獨<sub>二</sub>入寡婦<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>黑暗<sub>レ</sub>独行<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>与<sub>二</sub>無頼子<sub>一</sub>往還<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>戲取<sub>レ</sub>物不<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>人私書<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>借<sub>二</sub>人物用<sub>一</sub>經<sub>レ</sub>旬不<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>還。